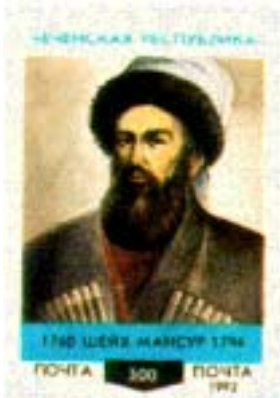


A.I. Feb. 1996

Chechenya



The famous Chechen,
Sheikh Mansur



Chechen President
Dzhokhar Dudaev

19世紀ロシア文学中に登場するコーカサスは、それ以前のグルジアではなく、このチェチェン・イングーシ、ダゲスタンなどの北部コーカサスを指す。トルストイはハジ・ムラートに関する著作をのこしている。ハジ・ムラートはチェチェン側の指導者だが、1864年にロシアに敗れる。トルストイの物語では、チェチェン人はあくまでもロシア人の支配に抵抗するあっぱれな敵となっている。レールモントフは、詩「イスマイル・ベイ」の中で「彼らの神は自由、彼らの法は闘い」と評した。このように1864年に終わるチェチェン併合の戦いはロシア文学の中の「敵＝コーカサス」のイメージを形成している。

ちなみにロシア語でグロズヌイ（Grozny）というのには恐ろしいという意味もある。イワン雷帝はイワン・グロズヌイと呼ばれる。首都グロズヌイはロシア帝国の要塞のおかれた土地である。

シェイフ・マンズールもチェチェンの国民的英雄の一人。彼の上着の胸の部分についているのは、グルジアなどでもおなじみのコーカサス扮装の典型で短剣などを入れている。今でも民族衣装として、コーカサス地方独特のものである。民族舞踊としては、いわゆるコーカサスダンス（剣舞と女性の輪舞）が特徴。

チェチェンの民族構成：宗教的にはイスラムとされているチェチェン人が中心だが、北コーカサスの中心部に位置するため、首都グロズヌイにはさまざまな民族が往来する。ロシア人入植者の数は分からないが、かなりの数に上ると見られる。なお、アフガン紛争に動員された部隊の構成員も大勢いたといわれている。

現状は、ロシア軍が駐留しつつ、ドゥダーエフ大統領派も勢力を維持している状態。

このロシア軍の撤退を要求する人質行為がチェチェン武装勢力によって何度となく起こされており、その最近のものが今月はじめのダゲスタン病院事件。

ソ連邦時代の山岳地帯は、いわば中央のコントロールを離れた場所といわれ、旅行などは不可能な状態だった。ただし首都グロズヌイなどは、洗練された地方都市として地域の中心としての役割を果たすとともに、西欧、東欧、ロシア、イスラム、少数民族の交差点として機能していた。独自の文化を保持し、長い歴史を持つグルジアとは対照的な立場に立っていたといえるだろう。

北コーカサスの民族は、古来から流動的だった。したがって先住民族と呼べるものはいない。キンメリア、スキタイ、フン、アラン、ハザル、キプチャクなどにより侵入された上、モンゴル帝国下では、キプチャク・ハーン国、ついでクリム、アストラハン両ハーン国の支配下におかれた。16世紀以降は北部からロシアのコサックが流入し、ロシアとの関係が深められた。対してザカフカスはウラルトゥ王国が紀元前9世紀から6世紀にかけて繁栄し、それがスキタイに滅ぼされた後もギリシア人国家コルキスができるほか、アルメニアにはアレクサンドロス大王とアケメネス朝ペルシアの影響下にオロンテス王国があった。紀元前4世紀にはグルジアのイベリア王国が隆盛し、アゼルバイジャンの地にはアルバニア王国も建国された。アルメニアとグルジアは、その後ローマの時代にキリスト教を国教とする世界最初の国家となり、それ以来宗教を変えていない。アラブやトルコの支配を何度も受けたが、12-13世紀にはバグラト朝（グルジア）がザカフカス全域を支配した。その支配はモンゴルによって破れ、18世紀に至るまで、外来勢力の侵入を受け、オスマン朝やイランの属国化した。マムルークを多く輩出したのもこの時期である。

北コーカサスは高度も高く、東側は遊牧地、西側は穀作地帯となっている。ザカフカスは気候が温暖だが西部は亜熱帯気候、東部は乾燥地帯となっている。カスピ海、黒海にはさまれ、いずれも保養地として名高い。またコーカサス山脈は高山がそびえ、通行はままたらないが、風光明媚で知られる。

言語：

チェチェンという名称は、彼らの住む土地名のロシア語読み由来する。ただ原語はカフカス諸語であろうといわれている。チェチェン人自身はノフチと自称する。

イングーシは、チェチェンと言語的には極めて近い同族だが、自分たちの呼称はガルガイとしている。1989年の調査によれば、チェチェン語人口は956,879に対してイングーシ語人口は237,438となっている。このチェチェン語人口は、グルジアについて、コーカサスで二番目の大所帯である。

言語の系統は、ナフ・ダゲスタン語系のナフ系で、カフカス諸語として分類される。他のカフカス諸語としては、アブハズ・アディゲ語系とカルトゥーリ系（グルジア語系）があるが、相互の関連はあまりないと言われ、しかもインド・ヨーロッパ語系（アルメニア、オセッ、クルド、タート、ロシアなど）やアルタイ系（トルコ、クムイク、ノガイ、カラチャイ、バルカル、アゼルバイジャン）などとも無関係で、コーカサス地方は系統不明の独立言語の増埒でもある。ロシア語は北コーカサスでは 1951 年調査で人口の 76%が母語としているが、ロストフ、クラスノダル、スタブロポリなどに集中する。ザカフカスでは 10%程度という。したがってチェチェン地方は、ロシア語ノバイリンガルが中心を占めているとあってよいし、この地方全体としてロシア人住人は強くはない。宗教は、ナフ・ダゲスタンはほぼイスラム教、アブハズ・アディゲ・チェルケスなどもイスラム教、カルトゥーリとアルメニアがキリスト教、アルタイ系もイスラム教、ただしアゼルバイジャンはイスラム教シーア派となっている。

民族問題とチェチェン：

ソ連の民族問題はペレストロイカ以降、全土で吹き出した。ただし、それを旧来の民族の怨念の噴出と捉えるのは早計である。なぜならば、ここでいう民族とはソビエトの民族政策によって「作られた」民族だからである。ソビエト政権は伝統的に民族を中心民族に同化する政策はとらなかった。理想的には将来の（共産主義社会での）統合を目指しつつ、各自の民族の存続を訴えたと同時に、政治的レベルでは、例えばルーマニアとモルドヴァ、フィンランドとフィン・カレロのように、隣国に対して民族自決を主張するが為に、故意に民族を創出するという面も持ち合わせたのである。ただし、その反面でロシア人勢力が相対的に強くなったことも否めない。ロシア語を主要言語とすることで、ロシア人入植は促進された。連邦構成共和国となった地域は、自己の民族言語を共通言語とする権利を持ち得たが、こんどはその共和国の中で、内部の自治共和国との対立が生まれたりもした。アブハジア問題はその例であるし、そうした事情の下では、かえってロシアとの関係を重視する民族も生まれる。このように政治的に作られた「民族」であればこそ、その民族自決の運動は政治的に尖鋭化する。これについては政治的産物としてのロシア民族も同様と考えられる。入植者や民族混合に対する反発も、その副産物である。ナヒチェバンのアルメニア人勢力が入植により少数派に転落したことを憂慮したアゼルバイジャンのアルメニア勢力による独立運動がナゴルノ・カラバフ問題の淵源だし、同様の事態は、ロシア人入植に対する非難にも見ることができる。チェチェンでは、ロシア人に侵入されたという感傷が強いが、そこには、ロシア帝国時代の問題だけに限らず、スターリンによるコーカサス民族強制移住の影響も大きい。但しここで注意すべきは、スターリンもまたオセッ出身であり、ロシア人ではない。またチェチェンのロシア人人口はさほど多くない。この政策はロシア人云々とは無関係で、本来、別の意図によるものである。

Ethnolinguistic Groups in the Caucasus Region



コーカサス地方の言語分布図。ソビエト民族政策は言語族 = 民族という立場をとった。